

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

現代における転職の意味の探究
－ 善財童子キャリアモデルの構成 －

氏 名

安藤 りか

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、頻回転職の経験に関する当事者の語り（ナラティブ）をデータとして採取し、その分析をとおして、現代社会における「働く」ことの心理・社会・文化的な意味を探索し、検討することである。

第1章では、まず、実態としては多くの人が転職を経験しているにも関わらず、転職をとらえる研究視点は否定的傾向にあるという問題を提起している。そして、転職についての否定的な観点に拘束されることなく、転職者の主観的認識やそれを生じさせた背景の文脈も含めて、多様な観点から転職を追究することの必要性を論じている。その上で、上記のような本研究の目的を設定し、最後に本研究全体の構成を示している。

第2章では、アメリカの組織心理学を中心とするキャリア研究におけるキャリアモデルの発展とそれに伴う転職観の変化の過程を明らかにしている。まず従来の国内の研究では必ずしも明示されてこなかった「転職」という言葉の定義について、海外の文献を概観している。次に、キャリアモデルが線形から非線形へと発展してきたことに伴い、研究における転職の位置づけが、「逸脱」→「組織内の転職」→「転職志向」→「組織内で有効に活かすべきもの」→「主体的に関わるもの」と変化してきたプロセスを、時系列に沿って明らかにしている。そして、現在では、「転社」の行動を伴わない「意識面での転職」にまで概念が拡大していることや、従来の研究の主流であったアメリカ以外の国々から「固有の社会・文化的文脈」を反映している転職の研究が新潮流として生じていることにも言及している。

第3章では、職業選択の心理的側面を説明する際に典型的に用いられる Erikson(1968)の漸次発達理論に代表される「古典的な移行モデル」を、学校が就職斡旋を担うことによって生徒・学生が企業

に就職できるという「学校経由の就職」が後退している現代日本における青年期の職業選択に適応しうる可能性と限界を検討している。事例として、大学中退後に、畜産業に就き、その後頻回転職を経て、現職である小学校教員になった男性 A 氏の語りを通した検討をおこなっている。その結果として、従来は不可分のプロセスとして解釈されてきた職業選択とアイデンティティ達成が、異なる別のプロセスとして進行している可能性を示している。また、就職している後に得る職業に対する肯定的な構えと実感を表す新規の構成概念「肯定的就業リアリティ」を提案している。

第 4 章では、頻回転職を否定視する観点からあえて離れ、頻回転職に潜在する心理・社会・文化的な意味の検討を行っている。事例として、中学校教員を初職とし、その後 13 回の転職をすべて自発的に行った男性 B 氏の語りとその心理的プロセスを分析している。そして、その結果として、「生活と職を分け隔てない職業観」「大幅な地域移動に対するこだわりのなさ」「個々の職における学びの志向性」という 3 つの特徴と、それらの非西洋的文化視点による検討の必要性を示している。その上で、それらを総合的に検討し、我が国で奈良時代より親しまれている、仏教の「華嚴経」に登場する人物「善財童子」をメタファーとして用いた頻回転職の新規のキャリアモデル「善財童子キャリア」を構成し提案している。

第 5 章では、第 4 章で提示している「善財童子キャリア」モデルの精査・拡充に向けた検討を行っている。具体的には、第 3 章のインタビューで、畜産職から頻回転職を経て現・教職へと転職している A 氏と、第 4 章のインタビューで、教職から頻回転職を経て現・畜産職へと転職している B 氏の、両氏の対面によるフォーカスグループを実施している。また、このフォーカスグループは、参加者が 2 名のみであり、データ採取方法としては新規なものであるため、その実施の意義と、実施にあたっての特別な配慮についても詳述している。そして、フォーカスグループのデータ分析の結果として、2 名の語りから、「天職」と「漂泊」という中核的概念を析出し、それらの概念に関する先行研究をレビューしているうえで、実際の語りの引用を示しながら、論考を行っている。最後に、善財童子キャリアの中に内包されている、「人と人との共生」「生産と生活との生態学的な一体化」という要素を示している。

第 6 章では、以上の各章についてふりかえりを行いながら本研究による知見の整理とその評価をおこなっている。その上で、本研究のインプリケーション、そして今後の課題と展望を示している。